様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：８２６２０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３０１８

研究課題名（和文）中世日本における中国美術の受容と羅漢の作例に関する調査研究

研究課題名（英文）Reserch and study about reception of Chinese art , art works of Arhat in Japan's medeival age

研究代表者
米沢　玲（Maizawa, Rei）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・主任研究員

研究者番号：８０７２６９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世日本における中国美術の受容という問題に羅漢の造形作品の調査を通じてアプローチを試みた。羅漢図の調査では、詳細な観察により図像が持つ意味や美術史的な位置づけを明らかにできたほか、図様が近いとされてきた複数の五百羅漢図の調査では図像の具体的な比較を行った。また、造形作品のみならず、羅漢が信仰されてきた寺院や地域のフィールドワークを行い、中世日本において羅漢信仰のあり方を土地や場という観点から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的な意義は、いくつかの羅漢図の詳細な観察を通じて、その美術史的な位置づけを明らかにしたことと、さらに信仰の場や安置場所の考察を行うことで中世日本の羅漢信仰を包括的に解明することを試みた点にある。大陸との往来が盛んになることによって隆盛した羅漢信仰は、単に文物が往来しただけではなく儀礼や安置空間・周辺環境といった情報も含めて伝来し形成されたものであり、その信仰の様相を探ることは中世寺院における日中交流の一端を解き明かすことにつながる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I attempted to approach the issue of the reception of Chinese art in medieval Japan through a survey of Arhats figurative works. In addition to clarifying the meaning of the images and their position in art history through detailed observation, the survey of 500 Arhats, which are said to be similar in style, allowed us to make specific comparisons of the images. In addition to the figurative works, fieldwork was conducted at temples and localities where Arhats were worshipped, and the nature of Arhats worship in medieval Japan was examined from the perspective of land and place.

研究分野：美術史

キーワード：羅漢　美術史　仏教美術　日中交流　儀礼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

羅漢の作例に関する調査研究は、この 20 年間で大きく進展してきたが、その一方で遺されている作例の数が多く、十六羅漢あるいは五百羅漢といった複数で構成される絵画や彫刻がほとんどであることから、個々の作例の詳細な観察や考察は十分になされてこなかった。羅漢信仰は中世日本において大陸との交流を背景にして隆盛したものであるが、羅漢図などの造形作品だけではなく、羅漢供養といった仏教儀礼や修行生活の方法も含めて包括的に寺院に羅漢信仰が受容されたと考えられる。すなわち、その信仰を具体的に解き明かすことは、中世寺院における日中交流の一端を明らかにすることにつながると考えた。

そこで本研究では、中世日本において制作された羅漢の絵画や彫刻といった作例の実地調査を進めながら、その礼拝空間あるいは安置場所のフィールドワークを行い、多角的な研究に取り組むことで羅漢信仰のあり方を解明することを目指した。

２．研究の目的

羅漢の作例、特に大徳寺伝来の五百羅漢図の中には、中世寺院で実際に行われていた仏教儀礼や修行生活の様子を反映した画題が存在することが指摘されてきた。生身の肉体を持ちながら悟りの境地に達した羅漢は修行僧にとって目指すべき理想の姿であり、単なる礼拝対象としてのみならず、僧侶たちが自身を投影する存在であった可能性が考えられる。大徳寺伝来の五百羅漢図に描かれる儀礼や修行生活はあくまで南宋時代のそれを反映しているが、そのような儀礼や修行生活は羅漢図とともに日本に伝えられたと考えられ、国内においても画題の持つ意味や機能がある程度は理解された上で信仰が広まったことが仮定できる。本研究では、そのような仮定に基づいて、国内に遺る羅漢の造形作品を調査し、その造形が持つ意味や機能が、どのように儀礼や安置空間と関わるのか、背景にある大陸と日本における仏教寺院の実態や仏教史、日中交流史を踏まえたうえで考察することを目指した。

３．研究の方法

本研究では、まず羅漢の造形作品の調査を実施し、その造形や美術史的な位置づけを検討すると同時に、その作例が安置あるいは信仰されてきた場についてもフィールドワークによって考察を進めた。作品調査は羅漢の絵画および彫刻を対象とした。五百羅漢図や十六羅漢図といった絵画は主として羅漢供養など寺院の仏教儀礼に用いられたことが想定できるが、図様や図像が非常に多様であり、調査によって作例を詳細に観察することで、その造形が持つ意味や儀礼に反映された機能についての考察を進めた。とりわけ大徳寺伝来五百羅漢図と図様に関連性を持つ円覚寺や東福寺の五百羅漢図は、これまで十分な比較検討がされておらず、詳細な調査を実施した。また、日本における五百羅漢信仰は中国･天台山における信仰と深い結びつきを持っており、中世に遡る彫刻の作例が安置されている場所は、地形や景観といった側面においても天台山との関わりが想定できるため、作品調査と併せてフィールドワークを実施した。

４．研究成果

絵画の作例に関しては、大徳寺伝来五百羅漢図と図様の関連性が想定できる東福寺および円覚寺に伝わる五百羅漢図の調査を実施した。いずれも百幅から成る大徳寺本あるいは類似する五百羅漢図を手本として、五十幅に再構成したものと考えられるが、図様や図像は両者でも一致せず、その具体的な関係性は明らかになっていない。本研究では特に「食事」と「浴室」という修行生活を描いたと考えられる画幅について、東福寺本と円覚寺本の調査を実施した。調査で得られた画像を基に両本の詳細な比較検討を進めたところ、興味深いことが分かった。「食事」の画題は大徳寺本では二幅に亙るが、東福寺本と円覚寺本では一幅に集約されており、彩色表現は異なるものの両本はほぼ同じ構図と図様を持っていることが分かった。特に人物の輪郭や衣服の形式などは、細部にまで一致が見られる。ただし、表現様式にはかなりの違いが認められるためいずれかが直接引き写して制作されたとは言い難い。一方、「浴室」では大徳寺本で五人描かれている羅漢を東福寺本と円覚寺本では十人に増やしている点は共通するが、構図そのものは両本で異なっており、円覚寺本に描かれる人物の表情や建築の構造といった細部の図様はむしろ大徳寺本に近いものであることが分かった。それに対して東福寺本では表現に独自のアレンジが加わっており、同じ登場人物でも大徳寺本や円覚寺本とは異なる姿勢や表情で描かれている。さらに東福寺本では、画中に描きこまれた道具類、例えば「浴室」で侍者が持つ香合には屈輪文と思しき文様が施されるなど、実際に当時用いていた生活用具を取り入れたことが推測できる。このような比較は他の画幅も含めて検討すべきであるが、修行生活という画題に関して、少なくとも東福寺本は、祖本を基としながら当時の僧院の実態を画中に組み込んで再構成した可能性が想定できる。東福寺本は 2008 年から行われていた修理が 2021 年に終了し、2022 年に

修理報告書が刊行されたほか、2023 年に開催された展覧会に全幅が出陳された。修理の過程や展覧会の開催によって新知見が出されており、新たな情報を取り入れながら引き続き考察を進めたい。

絵画に関しては当初、五百羅漢図を中心とした調査を予定していたが、研究期間中に東京・光明寺において羅漢図を見出し、調査を行った。本図は明治 28 年（1895）の『國華』74 号に図版が紹介されていたが、その後は所在が分かっていなかった。調査ではカラー画像に加えて赤外線・蛍光撮影による光学調査を実施し、作品の保存状態を詳しく観察した上で、様式や図像、伝来に関する口頭発表を行い論文としてまとめた（米沢玲・安永拓世「光明寺所蔵羅漢図につい―重層的な作品理解を目指して―」『美術研究』437、p.1-29、2022 年 8 月）。光明寺の羅漢図は元時代に遡る羅漢図と考えられ、その構図から舎利信仰に関わるものと推定できる。従来あまり個々の図像が分析されてこなかった羅漢図について、具体的な信仰背景を指摘できたことは大きな成果と言える。さらに光明寺羅漢図については彩色材料に関する調査を保存科学分野の研究者と共同で実施し、論文として発表した。

彫刻の五百羅漢に関しては特にフィールドワークを重視した調査を実施した。中国・天台山では五百羅漢図が安置されていた石橋周辺を始め、周辺環境を確認した。さらに国内で中世に遡る五百羅漢像が安置されている山梨・羅漢寺と大分・羅漢寺においても、作品調査のみならずフィールドワークを行った。天台山は急峻な山が連なり、水流が豊富な場所であることがよく知られているが、山梨・羅漢寺が位置する昇仙峡および大分・羅漢寺が位置する耶馬渓もまた、川沿いに険しい山が連なる自然環境である。山梨・羅漢寺は現在山裾に位置しており、五百羅漢像も隣接する堂内に安置されているが、元は山中にあったことが分かっている。また、大分・羅漢寺は現在も堂宇が山上にあり、岩窟内を中心に、山中のあちこちに羅漢像が配置されている。こういった安置方法は自然環境も含めてまさに中国の天台山を踏襲したものであり、地形を前提として羅漢信仰の場が選択されていることがよく分かる。このような選択そして羅漢信仰の場の形成が、国内においてどのような情報を基に、またどのような人物によって行われたのか、今後の考察を進めていきたい。

2020 年からのコロナウイルスの流行に伴い調査のための移動や出張が制限され、予定していた研究期間を 2 年延長した。結果として実施できなかった調査や研究期間の後半に実現した調査も多く、期間内に十分な考察を進め成果としてまとめることができなかった。引き続き検討を進め、特に東福寺本と円覚寺本の詳細な比較、国内における中世の天台山信仰のあり方について考察し、論考として執筆する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 米沢玲	４．巻 252
２．論文標題 仏教美術と茶：羅漢図に見る喫茶文化	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アジア遊学	６．最初と最後の頁 162,168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 米沢玲、安永拓世	４．巻 437
２．論文標題 光明寺所蔵羅漢図について－重層的な作品理解を目指して－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 美術研究	６．最初と最後の頁 1,30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 米沢玲	４．巻 438
２．論文標題 展覧会評「ブッダのお弟子さん　教えをつなぐ物語」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美術研究	６．最初と最後の頁 41,48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 紀芝蓮、犬塚将英、米沢玲、安永拓世、江村知子、高橋佳久	４．巻 62
２．論文標題 光明寺所蔵羅漢図に使用された彩色材料	５．発行年 2023年
３．雑誌名 保存科学	６．最初と最後の頁 85,97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 米沢玲
2．発表標題 光明寺所蔵の羅漢図について―光学調査とアーカイブの活用事例―
3．学会等名 東京文化財研究所令和3年度第3回総合研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 米沢玲
2．発表標題 片野四郎旧蔵の羅漢図について―図様と表現の考察―
3．学会等名 令和2年度第8回文化財情報資料部研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 米沢玲
2．発表標題 大徳寺伝来五百羅漢図と『禅苑清規』―描かれた僧院生活―
3．学会等名 東京文化財研究所第53回オープンレクチャー
4．発表年 2019年

1．発表者名 米沢玲
2．発表標題 仏教儀礼と茶
3．学会等名 茶の湯文化学会例会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関